

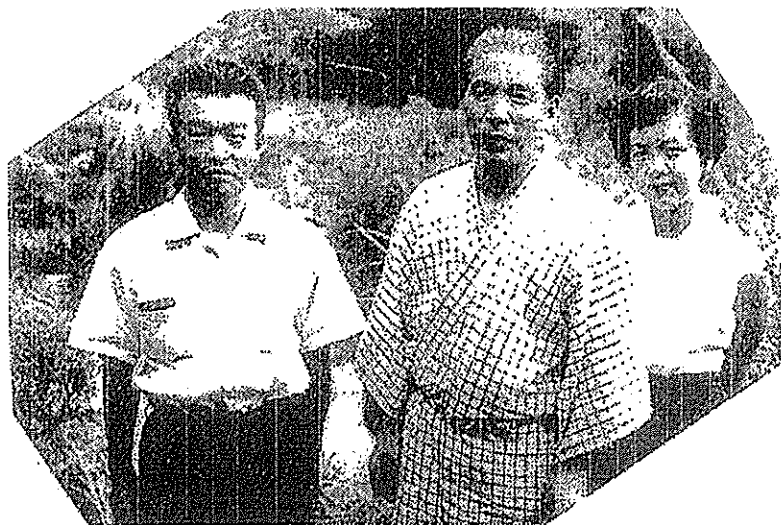
# 一休園の筆匠

一休園代表取締役会長・久保田哲曉

一休園は、筆者の父玄一が叔父の経営する久保田号から1949年に独立開業した日にスタートした。祖父久太郎が知己の職人から筆を仕入れ、近隣のユ一ザ一たる役所、学校などへ行商した21年を創業としている。玄一も独立開業したものの、それまで担当していた山口、九州方面へは行かず、逆方向の四国、岡山、兵庫方面をゼロから開拓した。これが当社には幸運だった。当時、上田桑鳩が飛雲会を創り、有馬で練成会を行っており、筆を見てもらう機会を得た。さらに桑田笹舟、深山龍洞といったかな

作家とも知遇を得て、当時の一楽書芸院の書家との縁をいただいたという。筆者が大学を卒業したのは71年であったが、家業を継ぐ意志は全くなく、毎日新聞社をはじめとする在京三紙を受験したが、単なる新聞記者への憧れだけではいかんともならぬ。当時、筆業界は小学3年生からの毛筆授業が必修となり、書道ブームのはしりの状況でもあり、両親からの帰れコールはさまざまなく、やむなく帰郷した。しかしながら、この業界に入り半年もするとその面白さが分かり、

## 穂先作りから彫銘まで



昭和20年代後期、有馬飛雲会練成会。右から神澤知丘、上田桑鳩の両氏、父玄一

1年もたつと天職のよいうな気がしてきたものだった。

当時弊社は営業エリアが中四国と兵庫、大阪くらいで、入社して最初の4年間は四国と関西を営業して回った。当時、四国では中原一輝、荒井天鶴、福原云外、河野如風といった先生方にご愛顧を

いただいた。それぞれの地元の書道用品店とも取引が始まり充実したスタートが切れたし、

宇野雪村を招いて練成会を行っており、出店させていただき、その折に雪村から「玄美」の選定をいただいた。75年に熊野町を東西に延びる熊野バイパスが完成し、そのほぼ中心地に新社屋を建て移転した。2階の大広間を錬成道場として開放して多くの近隣の書道団体が使用してくれている。1階では職人を社内に入れ、穂先作りから彫銘までの一貫生産体制を始めた。それまで熊野町では職人は中に置かず、町内の職人に仕事を回して作る、いわゆる問屋制家内工業が一般的だったが、新たな生産体制が独自の筆作りや別注品の迅速な対応、品質管理といった上で貢献してくれていたことはいまでもない。

(敬称略)